

評価を通じて一人ひとりの良さに着目し、自己変革を促す

学習評価の規準や方法は、必ずしも学校全体で共通理解されていないのが現状だ。

新課程では、思考力・判断力・表現力の育成が重視され、

それらの力を適切に評価することも求められている。新課程における学習評価のあり方について、

国士舘大の北俊夫教授と東京都足立区立本木小学校の平山仁美校長に聞いた。

■学習評価の役割

成績を付けるよりも

「学力」を付けるためのもの

——学習評価の役割について、まず先生方の考えをお聞かせください。

北 「学習評価」と聞いて、多くの人が思い浮かべるのは、通知表やテストだと思えます。つまり、成績を付けて記録し、本人や保護者、上級学校に伝えることが、学習評価の役割だと考えている人が多いということです。

確かに、成績を付けることは学習評価の重要な側面ではありますが、本来の役割は別にあると考えます。それは子どもの学力を伸ばすことです。学習評価は、「成績を付ける」

ことよりも、「学力を付ける」ことを優先して行われるべきではないでしょうか。

平山 おっしゃる通り、学習評価の主たる役割は、一定の尺度を設けて付ける「評定」とは異なると思います。学習評価は、子ども一人ひとりの良さや可能性に着目し、その一層の開花を促すものです。教師は評価を機に、子どもを更に伸ばしたり変容させたりする方策を考えます。それをせずに一方的に教えるだけでは、教師としての役割を十分に果たしていないと思います。

北 2010年3月に中央教育審議会が出した「児童生徒の学習評価の在り方について」の報告には、学習評価の役割に関する重要な指摘があります(図1)。ここでは、学習指

図1 学習評価の役割について

3. 学習評価の今後の方向性について

- (1) 学習評価の意義と学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性

…学習指導要領は、各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し、学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。

導要領は「指導」の面から、学習評価は「結果」の面から、教育水準の維持向上を保障するものであると述べています。つまり、学習評価は、「評定を付けて終わり」というのではなく、もし「不十分」と評価された子どもがいれば、学力を付けるために再び指導することに生かされるものです。

「指導と評価の一体化」とよくいわれますが、教育水準の維持向上のためには「目標と指導と評価の一体化」が大事だと考えます。明確な目標に沿って指導と評価を行うからこそ、つまり目指している子どもを指導できます。目標と指導と評価は三角形の頂点に位置付けられるのです。

平山 学校では、目標に準拠して観点別の評

出典／文部科学省中央教育審議会 初等中等教育分科会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2010年3月)より抜粋

子どもが伸びる学習評価

国士舘大体育学部こどもスポーツ教育学科
北俊夫 教授

きた・としお◎東京都公立小学校教諭、東京都教育委員会指導
主事、文部省（現文部科学省）初等中等教育局教科調査官、岐
阜大教授を経て現職。専門は社会科教育、教育課程論。著書に
『子どもの学力をつける学習評価』（文溪堂）、『新社会科／全学
年・単元の評価規準一覧』（明治図書出版）など。



東京都足立区立本木小学校

平山仁美 校長

ひらやま・ひとみ◎東京都の公立小学校教諭、足立区立花畑西
小学校長などを経て、現職。
足立区立本木小学校◎2012年4月、本木小学校と本木東小
学校が統合してできる。「子どものよさを大切に、どの子
も伸ばす本木の教育」を目指す。児童数は450人。

評価規準（判断する際のものさし）を作成して
評価を行います。目標に達していない子ども
には、支援をする必要があります。もし、多
くの子どもが目標に達しない状況にあるなら
ば、教師の指導に問題があると考えられます。
つまり、目標に準じた学習評価は、子どもの
学習状況を把握すると共に、教師が自分の授
業を振り返る指標となるわけです。

学習評価のもう1つの意味は、子ども一人
ひとりの良さや可能性を見いだすことにあり
ます。教師は、子どもの発想や着眼点などを
肯定的に受け止めて、個性を発見し、その伸
長を促すような評価を心掛けなければなりま
せん。

北 平山先生がお話しされた通り、学習評価
には「教師」と「子ども」の2つの軸があり
ます。教師が設定した目標や評価規準に達し
たかどうかを見る評価と、その子どもが以前
に比べて成長した部分を見る評価や、相対的
に得意なことを見いだして行う評価です。後
者の子どもを軸にした評価を「個人内評価」
といい、目標に達していなくても、以前より
も進歩の状況が見られれば褒めることが出来
ます。

平山 学習評価の基本は、褒めて伸ばすこと
にあると思います。褒めることで次への意欲
が出てきますし、自分からやってみようとい
う積極性も生まれるでしょう。「面白いこと
に気付いたね」「いい意見だね」など、まず

は子どもの考えを認めることが大事だと考え
ます。

北 「成長したね」と言われれば誰でもうれ
しいですし、自分が頑張ったことに自信を持
てます。褒めた上で、どこを頑張ればもっと
良くなるか、更なる課題を伝えようと、やる気
が出てきます。

学習評価における課題

経験豊富な先生から

継承したい指導と評価

——学習評価について、どのような課題があ
るのでしょうか。

北 学習評価は、子どもに学力を付け、伸ば
すために行うものです。しかし、教師によっ
て意識にばらつきがあるのが現状のようです
（P.6図2）。先生方は、評価を評定として捉
える傾向が強く、保護者に評価の結果を伝達
するために行うという、学習評価が目的化し
ていることは否めません。また、子どもの成
績が悪いと、教師は指導上の責任が自分にあ
ると考えてしまう面もあります。そのため、
学習評価の研究に熱心になれないのだろうと
思います。

国立教育政策研究所が示している評価規準
や評価方法は、教科ごとの専門家が作成して
おり、大変よく出来ています。しかし、全教
科を教える小学校の先生には、それらを全て

図2 学習評価についての課題

- 数値化が難しい、点数では測りきれない
- 評価規準に客観性を持たせることが難しい。教師の主観になってしまう面がある
- 教師の力量の問題、教師によるばらつきがある
- 教師自身の意識改革と一層の力量向上がなかなか進まない
- 上記のような評価の課題を克服するだけの時間がない

*「VIEW21」小学版読者モニターアンケート（2012年3月実施）

新課程になり、思考力・判断力・表現力

■ 思考力・判断力・表現力を高める学習評価
**思考力を育む指導を工夫することで
 自ずと学習評価も出来る**

使いこなせないことも、学習評価が難しいと捉えられている一因なのかもしれません。更に、指導や評価の技法がベテラン教師から若手教師に継承されにくくなっていることも、学習評価の課題に挙げることが出来ます。

平山 若手教師には、出来るだけ教職経験の豊富な教師の授業を見に行くように指導しています。ベテラン教師がほとんど退職し、年齢層のバランスが崩れつつあるため、問題意識を持って取り組むべき課題だと考えます。

などが当初より育てているという調査結果もあります（図3）。それらの力を伸ばすためには、どのような学習評価が適切だとお考えですか。

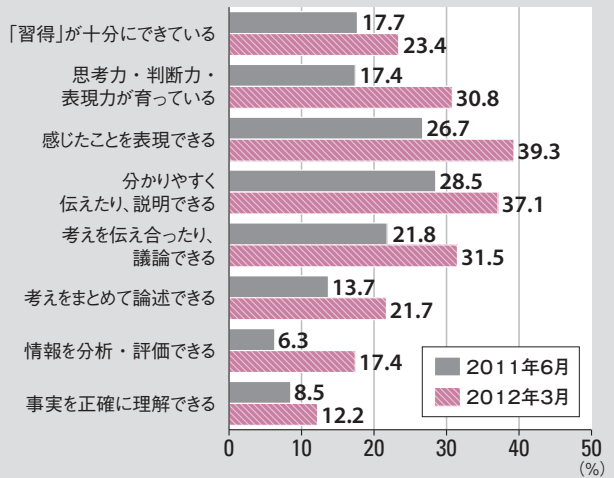
平山 今の子どもは、「なかなか自分の考えを持ってない」「判断や表現が苦手」といわれます。しかし、それは、子どもが自ら考える、判断するような場面を、授業にあまり設けていなかったことの裏返しではないかと思えます。例えば、授業で子ども同士が考えを「伝え合う」場面はあっても、友だちと考えを深めたり、新たな考えを生み出したりといった変容に至るような「話し合い」になっていないケースはよく見られます。

北 日本の教師は、「教え上手」といわれています。知識や技能を教えるのは得意ですが、「育てる」ことはあまり得意ではないようです。思考力・判断力・表現力は教える身に付くものではありません。教育の「育」の部分であり、「関心・意欲・態度」と同じように、育てて身に付いていくものです。その育て方についてはまだ十分な実践がなく、指導方法が定着していないのが現状です。

平山 思考力などを育てるには、「考えなさ

図3 子どもの能力について感じる変化

◎新学習指導要領の実施によって、児童はどのように変わってきていると思いますか



注1) それぞれの児童が「増えた」の%
 出典/Benesse 教育研究開発センター「新教育課程2011年度末調査」

新課程の実施以降、教師は子どもの思考力・判断力・表現力などの力が徐々に育ってきていると実感している

い」と言っって子どもに任せるのではなく、教師がしっかりと取りをする必要がありま

す。板書で子どもの考えを整理しながら話し合わせたり、あるテーマについて「あなたは どう思いますか」と発問したり、教師が導いて子どもの思考を引き出すことが大切です。

北 思考力・判断力・表現力を評価するのは難しいとよくいわれますが、それらの能力を育む指導が出来ていけば、自ずと評価できると思います。指導と評価は一体のものだからです。どのように思考力を育てるかを考えた授業では、あらかじめ子どもの思考の流れを想定しているため、子どもの思考の状況を見取ることが出来ます。

子どもが伸びる学習評価

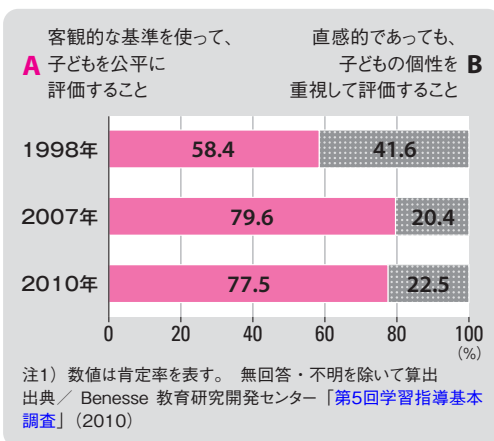
平山 子どもがどのような考えや判断をしたのかを把握するには、根拠を明確にすることが何より重要だと思います。そのためには、子どもが考えたことを表出させる必要があります。具体的には、ノートに自分の考えやその理由を書かせる、話し合いなどの交流場面を設けて考えの変容とその根拠を明確にさせるといった学習活動を通して、子どもの思考や判断の様子を把握できます。

北 子どもに根拠を考えさせることが大切です。例えば、工場見学に行った後、必ず感想を聞くと思います。「大変だと思いました」「やりがいがありました」と思ったことを答えさせて終わってはいないでしょうか。「どうして、そう思ったのか」と問い返せば、概念を具体化させる「演繹的」な思考を促せます。更に、いろいろな考えが出てきた時には、「まとめてごらん」と問い掛け、整理させることで「帰納的」な思考力が育ちます。子どもの発言に対して教師はどのように応えるかによって、思考力の育ちは大きく変わります。若手の先生は、経験豊かな先生と子どもとの発言のやりとりをよく聞き、そうした力を磨いてほしいと思います。

児童理解を研鑽し 評価の妥当性や信頼性を高める

——目に見えない力を測る上では、評価の客観化が難しいという声も聞かれます(図4)。

図4 教師の評価に関する意識の変化



教師の客観的な基準を使った評価への意識は高まっている

平山 数値化できる力は一部に過ぎず、教師が子どもの内面を丁寧に見取ることが重要です。人が人を見るわけですから、100%客観的というのは無理がありますが、経験を積んだ教師の目は節穴ではありません。一人ひとりの子どもの良さや可能性をきちんと見抜いて評価できると思います。

北 そもそも、教師によって子どもに対する見方に多少の違いがあることは、むしろ自然なことではないかと考えています。教師による見方の違いは、多様な評価につながります。子どもを複眼的に見取る「トンボの目」は大切で、教師それぞれに見方の持ち味があっても良いと思います。

平山 確かに、担任が変わることによって評価が変わり、自信を持つ子どももいます。1人の教師が子どもに与えられる刺激には限界

があり、違う教師が違う刺激を与えて、子どもの新たな良さを引き出していくことも大切ですよ。

北 「きちんと評価されている」という信頼関係が、教師と子ども・保護者との間に築けていけば、ある程度の主観が入っても問題ないのではないかと思います。客観性のみを重視すると、評価方法が固定化し、学力の総体を捉えにくくなる恐れもあります、目に見えない部分や内面を捉えるなど、児童理解の研鑽を重ね、評価の妥当性や信頼性を高める工夫をすることが大切です。

実践のヒント

自己評価や相互評価で 子どもの自己変革を促す

——学習評価をより効果的に行うには、どのような工夫があるでしょうか。

平山 前任校では「評価・支援シート」の活用を試みました。授業のねらいに最も直結する場面で使用します。児童の座席表があり、欄外には評価規準および想定される支援などを書いておきます。机間指導の際に有効です。教師が予測できていないつまりきもあるため、用意した支援策では十分に補えないこともあります。あらかじめ考えておくのとそうでないのでは大違いです。

北 どの場面で評価するかというタイミング



も重要です。例えば、記録に残すための終末のまとめの場面だけにします。それを授業後に確認するようにして、授業中は指導に専念します。

授業では、全員に十分な学力を付けさせることを念頭に置き、出来ていない子どもをなくすことを最優先に考えていただきたいと思っています。

平山 もちろん、まずは指導第一です。そし

て、その指導内容を子どもがきちんと理解しているのか、一人ひとりの学習状況を見取るとともに、「せかささない、待たせない」ということを心掛けています。出来ない子どもにはせかさずに根気強く指導する一方で、出来た子どもにはチャレンジ問題を用意するなどして、一層定着させたり、新たな意欲を引き出したりします。

北 出来た子どもに、つまづいている子どもを教えさせるのも1つの方法だと思えます。教えることを通して、更に理解が定着したり深まったりするからです。

平山 子どもの自己変革のきっかけとして、自己評価も大切にしています。今日のめあてに対して、自分の取り組みがどうであったのかを自分自身で評価させることも有効です。その時間の成果や課題を自分なりに明らかに出来るからです。

北 自分の学習を振り返ることで、学習への充実感や満足感を味わうことが出来るところに、自己評価の良さがあります。

平山 高学年では相互評価も行くとよいでしょう。友だちから褒めたり認められたりする事は、子どもにとって、教師や保護者からの評価とは異なる、格別な喜びがあります。子どもたちが共に認め合う関係が生まれ、人間関係がうまくいくことにもつながります。互いの良い点に着目させることがポイントだと思います。

時間を有効に使い 重要な場面を丁寧に見取る

平山 教師は多忙ですから、学習評価についてじっくり研究をし、手間を掛けて評価をするというのは、現実的にはなかなか難しいものがあります。本校では、評価の簡素化も考えています。例えば、先程お話しした「評価・支援シート」は、現任教でも活用しています。が、全ての授業で使用するのではなく、単元の第3時と第6時というように、有効な場面を選択して活用します。他の時間は、時間内のポイントとなる箇所での児童のノートや発言の板書記録などを基に確認する方法を取っています。

北 毎時間、全ての子どもをABCで評価をするのは、無理なことではないでしょうか。その時間の目標に照らして、「出来た、出来なかった」を判断するくらいでよいかと思えます。その記録を基に、単元ごとにABCで評価すれば十分だと思います。

平山 あまりにも評価に追われると、評価のための評価となってしまう恐れがあります。ただし、テストだけで評価をしていては、子どもの良さや可能性、授業の問題点などを見逃してしまいかねません。子どもに考えをノートに書かせておいて授業後に確認するなど、時間を上手に使って、子ども一人ひとりの考えやその背景を評価することを心掛けた

子どもが伸びる学習評価

いと思います。

評価の目的を繰り返し発信し 保護者との信頼関係を築く

保護者が通知表をどのように捉えて、子どもと接するのも重要なと思います。保護者と学校との関係づくりについてアドバイスをいただけますか。

平山 通知表の所見欄には、子どもの成長した面を中心に記載し、子どもの課題は、学校が今後どのような指導をするのかという角度から書くようにしています。毎年、保護者から通知表の見方をプリントで伝え、子どもの良さや成長を理解するために、評定だけでなく所見欄にも注目していただいています。

北 保護者は、学期末に通知表でいきなり評価の結果だけを知らされると不安を感じます。年度や学期の始めに白紙の通知表をコピーして配り、学習の目標や評価の観点を事前に説明しておくとういでしょう。その際に、評価は、テストだけでなく、さまざまな方法で行われることも伝えておくとういでしょう。

平山 保護者からは、テストでは高得点なのにどうして評価が良くないのかと説明を求められることもあります。いろいろな面から子どもの力を評価していると説明することは、確かに大切です。

北 最終的には、「この先生が評価しているのだから間違いない」という信頼関係が出来る

ていることが重要です。

平山 教師によっては、ついつい評価を甘く付けてしまう傾向があるようです。しかし、子どもの力を伸ばすためにも、自信を持って評価しなければなりません。それは、自分が教師として、その子の成長を更に支援していくという意思表示でもあります。

また、学力調査などの結果は、出来る限り、保護者に対して伝えていきます。厳しい結果が出たならば、それと改善策を伝えて、協力を求める態度も大切だと考えています。

校長の役割

教師が一丸となって子どもを伸ばす共通理解を持つ

子どもが伸びる学習評価を行うために、校長として何をすべきだとお考えですか。

平山 評価というと、「大変」「面倒」という意識が強いかもしれませんが、校長として、まず、しっかりとした考え方を示して校内で共通理解を図ることが大事です。校内研修や職員会議などを通して、「こんな授業を目指そう」「こういう場面を捉えて評価しよう」「通知表はこうしよう」といった方向性を、教師間で共有できるようにしています。

校長の考えが教師の考えに影響を与え、その結果、子どもを伸ばせるかどうかが決まると言っても過言ではないでしょう。学習だけ

図5 評価の取り組みを進めるポイントと授業を見る視点

◎ 評価の取り組みを進めるポイント

- 1 指導と評価の充実を一体的に考える
- 2 評価の目的について合意形成を図る
- 3 評価と評定を区別し混同しない

◎ 授業を見る観点

- 1 その時間の目標（ねらい）は何か
- 2 目標に沿った指導の流れになっているか
- 3 目標の実現状況が把握される場面はどこか
- 4 その場面では子どもの学習状況をどのような方法で見極めようとしているか（評価方法、評価規準、観点）
- 5 つまずいている子どもへの支援方法を具体的に考えているか

*北先生のお話を基に編集部で作成

ではなく、人としての基礎・基本を学ぶ小学校段階においては、教師が一丸となって子どもを伸ばすという意識が特に重要だと思えます。また、子どもが伸びるきっかけはそれぞれですから、そのきっかけをきちんと見付けられる教師を育てていくことも、校長の役割ではないでしょうか。

北 評価の取り組みを進めていく上で、校長先生に意識していただきたいポイントと授業を見る観点をまとめました（図5）。個々の先生方の指導や評価を高めるために、ぜひ意識していただきたいと思っています。

学習評価は、子どもの成長の記録であると同時に、指導改善に生かすという点で、学校評価や教員評価のねらいと同じだと考えます。学習評価を進める上では、より良い方法に気付いたら常に修正するという視点も求められるでしょう。

——本日はありがとうございました。